

論文

高齢者のソーシャルネットワークの特徴と生活満足度との関連に関する研究

— 4つの地域特性別分析の試み —

石川 久展^{*1}, 冷水 豊^{*2}, 山口 麻衣^{*3}

関西学院大学^{*1}, 日本福祉大学客員教授^{*2}, ルーテル学院大学^{*3}

● 要約 ●

本研究の目的は、農村地域在住の健康な一般高齢者のソーシャルネットワークを地域特性別に分析し、地域により高齢者のソーシャルネットワークにどのような特徴があるのかを把握すること、また、ソーシャルネットワークが高齢者の生活満足度にどのような影響をもたらすのかを把握することである。調査対象者は、C市在住の60歳から74歳までの高齢者であり、訪問面接法により810人を対象とした。使用した従属変数は、生活満足度であり、独立変数は、ネットワークサイズと頻度からなるソーシャルネットワークである。その他の変数は、基本属性関連変数である。一元配置の分散分析の結果、農村と旧住宅地の特性をもつ地域在住の高齢者の方が他の新興住宅地域や農村・住宅混合地域よりもネットワークが豊かであること、また、社会活動に参加している人の方がそうでない人よりもネットワークがあることがわかった。生活満足度を従属変数として、4つの地域別に重回帰分析を行ったが、いずれにおいても生活満足度に有意な影響を与えているのは、ネットワークサイズであることが確認された。ネットワークが高齢者のQOLを高める要因であることが示唆された。

● Key words : ソーシャルネットワーク, 生活満足度, 高齢者, 地域特性, インフォーマルケア

人間福祉学研究, 2 (1) : 49-60, 2009

I. はじめに

高齢者のソーシャルサポートやソーシャルネットワークなどの社会関係に関する研究は、それが高齢者の生きがい、満足感、精神的健康や身体的健康、死亡率などと関連するということから、欧米においてはもちろんのこと、1990年代以降、わが国でも社会学、社会老年学、心理学、社会心理学、看護学、精神医学など様々な研究分野で盛んに行われてきている(石川1998)。近年、社会福祉研究においても、ソーシャルサポートやソーシャルネットワークに関する研究が多くなされる

ようになってきた(峰島2008;林ら2008;広瀬ら2006)。その背景には、ソーシャルサポートやソーシャルネットワークが利用者やその家族などの現実的な支援に有効であること、また利用者や家族がかかえる様々なストレスの緩衝効果があることなど、社会福祉分野でもその効果が注目されていることがある。

ソーシャルネットワークは、地域社会にある家族・親戚、友人・知人、隣人などインフォーマルな対人関係の構造を表すものであるが、社会福祉分野では、ソーシャルネットワークよりも、どちらかという対人関係の機能的側面を評価する

ソーシャルサポートに焦点をあてた研究が多く行われており、ソーシャルネットワークに関する実証研究報告は非常に限られている¹⁾。ソーシャルネットワーク研究は、主として欧米で発展してきた研究テーマであり (Antonucci 1990; Cohen & Syme 1985)、わが国でも 1980 年代から今日まで、社会学、老年社会学などの社会福祉以外の他の研究領域において、ソーシャルネットワークに関する実証研究は数多く行われている (澤岡ら 2006; 小林ら 2005; 原田ら 2003; 野口 1991; 玉野 1990; 玉野ら 1989; 西下 1987)。

わが国では、近年、高齢者の介護問題が一層深刻化するなか、介護保険制度などの公的サービス以外に、家族・親戚・友人・知人・隣人などのインフォーマルケアの拡充の必要性が叫ばれている。地域社会におけるインフォーマルケアを活用するためには、地域において住民同士のつながりや結びつきの状況やその特徴を把握・検討することが必要である。そして、家族・親戚、友人・知人、近隣の対人関係を測定するネットワークの実証研究は、インフォーマルケアを推進するためには不可欠なものといえる。

上述したように、ソーシャルネットワークは、高齢者の生きがい、精神的健康などと有意に関連していることが報告されているが (石川 2001; 玉野ら 1989)、さらにネットワークは QOL の主観的な指標の一つとして活用されている生活満足度とも有意に関連していることが報告されている (西村ら 2003)。

以上のような研究の背景を踏まえ、本研究では、農村地域在住の健康な一般高齢者のソーシャルネットワークを地域特性に基づいて 4 つの地域別に分析し、地域別に高齢者のソーシャルネットワークにどのような特徴があるのかを把握すること、また、ソーシャルネットワークが高齢者の生活満足度にどのような影響をもたらすのかを把握することを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象者と調査方法

本研究の調査対象地は、N 県 C 市 (2008 年 10 月現在、人口約 5 万 7 千人、高齢化率 22.4%) である。2008 年 10 月現在、人口は約 5 万 7 千人であり、高齢化率は 22% となっているが、調査を実施した 2003 年時点では、16.9% であった。本研究では、C 市において健康で、ケアが必要ではなく、まだ社会的に様々な活動を行っている高齢者を研究の対象と考え、C 市在住の 60 歳から 74 歳までの在宅高齢者を調査対象とした。C 市の協力を得て、住民基本台帳から二段無作為抽出を行い、1059 名の標本を抽出した。なお、要介護度 1 から 5 までの要介護高齢者は、本研究の調査対象から除くこととした。1059 名の調査対象者に対して、訪問面接法 (一部留め置き) を用いてアンケート調査を実施した。調査対象者への有効回答数は、810 名であり、回収率は 76.5% であった。調査期間は、2003 年 11 月から 12 月である。なお、調査対象者への倫理的配慮としては、調査協力の依頼文の中で個人の名前等の個人情報が入らないことや統計的分析を用いることを周知すると共に、回答を拒否をしても差し支えないことを知らせることで配慮した。

2. 調査項目

1) 従属変数

本研究における従属変数としては、従属変数である QOL を測定する尺度として生活満足度を用いた。生活満足度は、主観的幸福感と並んで QOL 尺度の一つとして用いられており (佐藤ら 1989)、近年、社会福祉研究においても実証研究がなされつつある (林ら 2008; 林ら 2006; 神部・岡田 2005)、尺度としては、Neugarten ら (1961) の LSI (Life Satisfaction Index) や Neugarten ら LSI をもとに、古谷野らが作成した日本版の LSI-K (古谷野ら 1990; 古谷野ら 1989) がよく用いられている。なお、古谷野らの生活満足度尺度であ

るLSI-Kは、人生全体についての満足感、心理的安定、老いについての評価、3つの因子構造から成り立っている。本研究における生活満足度尺度については、C市という農村地域で生活する高年者という視点から、家族関係、近所・知人・友人との関係、地域における社会活動、経済状況及び全体満足度の5項目によって評価し、その合計得点を尺度得点として用いた。なお、尺度の信頼性については、信頼性係数の α が0.849であり、十分な信頼性が確保された。

2) 独立変数

ソーシャルネットワークの測定尺度についてであるが、Barnes (1954) や Bott (1971) によって始められたとされるネットワークの実証研究は、Berkman と Syme (1979) や Cohen と Syme (1985) らの研究を契機にさらに広がりを見せ、それ以後、数多くの実証研究がなされている。O'Reilly (1988) によると、ソーシャルネットワークの構成要素には、次の2種類がある。1つは、構造的要素 (structural component) であり、もう1つは相互作用的要素 (interactional component) である。構造的な要素には、関係、サイズ、密度、近接性などの下位尺度が含まれ、相互作用的要素には、持続性、交流頻度、強度などが含まれ、O'Reilly (1988) は、ソーシャルネットワーク研究においては、これらの7つの尺度項目が最も頻繁に使用されていると指摘している。

わが国の老年学分野におけるソーシャルネットワーク研究をみると、その初期には藤崎 (1985)、西下 (1987)、玉野ら (1990)、古谷野 (1991) など様々な先行研究が報告されているが、ソーシャルネットワーク尺度については、社会関係に関する論文で頻繁に引用されている野口 (1991) の研究報告が、他の研究におけるネットワーク尺度採用の原点となっているようである。なお、最近の研究では、友人や近隣ネットワークに焦点をおいた研究報告がよくみられているが (澤岡ら 2006; 小林ら 2005; 浅川 2003; 古谷野ら 1998)、本研究

においては、野口の尺度を参考にソーシャルネットワークをネットワークサイズと交流頻度の2つを下位尺度として採用することとした。ネットワークサイズと交流頻度は、いずれも3項目ずつで構成されている。ネットワークサイズについては、親しくしている親戚数、親しくしている近所の人数、近所の人以外で親しくしている知人・友人数の3項目について、「いない」から「10人以上」までの6件法で尋ねており、サイズが大きくなるほど得点が高くなっている。交流頻度についても親しくしている親戚、親しくしている近所の人、近所の人以外で親しくしている知人・友人との交流頻度について、「年1回～数回程度」から「ほぼ毎日」までの5件法で測定し、交流頻度があるほど高得点としている。それらの合計得点をそれぞれネットワークサイズ得点と交流頻度得点とした。

3) その他の変数

本研究では、地域特性別による分析を試みるが、C市の地域特性とその地域特性をどのように分類したかを簡単に説明する。C市の地域特性の分類については、C市全域を熟知している社会福祉協議会の職員及びC市の介護保険課職員の2人に対してヒアリングを行い、最小の地域行政単位である行政区をもとに、調査対象地となったすべての行政区の特性を検討し、その地域特性による分類を試みた。その結果、農村地域、旧住宅地域、新興住宅地域、農村・住宅混合地域の4つに分類することとなった。農村地域は、古くからの農家が多い地域であり、そのほとんどが山間地部分にあたる。旧住宅地区は、C市の交通の拠点となるJR・C駅とその周辺の商業地域が中心であり、戦前からの住宅地域である。新興住宅地域は、戦後、大規模な住宅開発によって開かれた住宅地域であり、C市に流入してきた人々の住宅地域でもある。最後の農村・住宅混合地域は、一つの行政区の中で農村地域と新興住宅地域の両方が混在する地域である。本研究では、これらの4つの地域特性別

にネットワーク分析を試みる²⁾。その他の調整変数としては、性、年齢、学歴、婚姻状態などの基本属性関連項目や、職業の有無、配偶者の有無、主観的健康感などがある。また、ソーシャルネットワークの平均得点を従属変数とした一元配置の分散分析の際には、ボランティア経験、地域活動経験などを独立変数とした。

3. 分析方法

分析方法については、各基本属性項目や地域特性とソーシャルネットワークの関連を検討するために、一元配置の分散分析を用いた。また、生活満足度を従属変数、ソーシャルネットワークや地域特性を独立変数、その他の変数を調整変数として、強制一括投入法による重回帰分析を行った。

なお、分析には、統計ソフト SPSS14.0 for Windows を用いた。

Ⅲ. 結果

1. 単純集計の結果

調査対象者の基本属性は、表1の通りである。対象者の男女比は、男性48.9%、女性51.1%とほぼ半数であった。年齢は、最低が60歳、最高が74歳、平均年齢は66.7歳であった。年齢階層別には、表1のように60歳から64歳までが36.2%と最も多く、65歳から69歳と70歳から74歳までは、それぞれ31.9%、32.0%とほぼ同率であった。学歴別には、高卒が6割近くと最も多く、一方、大卒はわずか6.2%であった。対象者のほと

表1 調査対象者の基本属性

性別	男性	48.9% (396)
	女性	51.1% (414)
年齢階層 (平均年齢66.7歳)	60歳～64歳	36.2% (293)
	65歳～69歳	31.9% (258)
	70歳～74歳	32.0% (259)
最終学歴	中卒	34.9% (281)
	高卒等	58.9% (474)
	大卒以上	6.2% (50)
配偶者の有無	有り	83.6% (674)
	無し	16.3% (132)
婚姻状態	既婚	83.6% (674)
	離婚	3.5% (28)
	死別	11.3% (91)
	未婚	1.6% (16)
主観的健康観	非常に健康である	16.6% (134)
	かなり健康である	28.1% (227)
	どちらかといえば健康である	38.2% (309)
	どちらかといえば健康ではない	9.9% (80)
	あまり健康ではない	6.4% (52)
	まったく健康ではない	0.9% (7)
地域特性	農村地域	29.6% (240)
	旧住宅地域	35.9% (291)
	新興住宅地域	24.4% (198)
	農村・住宅混合地域	10.0% (81)

% (度数)

んどが高卒以下であり、大卒以上の高学歴の高年者はそれほど多くはなかった。配偶者がいる高年者は8割以上であり、配偶者がいる人がほとんどであった。地域特性については、農村地域が30%、旧住宅地域が36%、新興住宅地域が25%、農村・住宅混合地域が10%であり、混合地域在住の高年者が他の地域と比べて少なかった。

次に、ソーシャルネットワークの単純集計の結果は、表2の通りである。ネットワークサイズの3項目については、全体的には回答が散らばっているのが特徴である。項目別にみると、親しい親戚数は「4から6名」が31.8%と最も多く、親しい近所の人数でも「4名から6名」が23.2%と最も多かった。親しい友人・知人の数では、「10名以上」が28.0%と最も多く、親しい友人・知人の数が多いという結果であった。一方、「いない」をみると、親戚ネットワークがない人は4.2%と少ないが、親しい近所の人や友人・知人がいない高年者は、いずれも1割を超えており、友人・近隣ネットワークが無い人が少なからずいることがわかった。この結果については、ネットワークサイズの項目を得点化し、その平均得点をみてもわか

る。親戚ネットワークの平均得点は3.88と最も高く、友人・知人が3.50、近隣が3.26と、親戚よりも低くなっている。これらの結果から、サイズについては親戚ネットワークが大きいことが示唆された。一方、交流頻度では、親戚との交流と友人・知人との交流は、「月に1～2回程度」がそれぞれ41.0%、39.9%と最も多く、これに「年1回～数回程度」を加えると、どちらも6割を超えることになり、親戚や友人らとの交流がそれほど頻繁ではないことを示している。それに対して、近所との交流は、「週に2～3回程度」と「ほぼ毎日」が最も多く、2つを合わせると57%になる。親しい近所との交流が頻繁にあるという結果が得られた。そのことは、表1の交流頻度の平均得点が近所との交流が3.63と、他よりもかなり高いことからわかる。まとめると、C市在住の高年者のソーシャルネットワークは、親戚ネットワークは多く、サイズ的には最も小さい近所とのつきあいが深いという特徴がある。

2. 属性別のソーシャルネットワーク分析

次に、調査対象者のソーシャルネットワークの

表2 ソーシャルネットワークの単純集計結果

サイズ	親戚数	近所の人数	友人・知人の数
いない	4.2% (34)	12.5% (101)	12.7% (102)
1名	5.0% (40)	7.8% (63)	6.0% (48)
2名	12.8% (103)	13.3% (107)	12.1% (97)
3名	12.1% (98)	17.7% (143)	17.4% (140)
4から6名	31.8% (256)	23.2% (187)	19.8% (159)
7から9名	11.2% (90)	7.2% (58)	4.0% (32)
10名以上	23.0% (185)	18.2% (147)	28.0% (225)
平均得点	3.88	3.26	3.50
交流頻度	親戚との交流	近所との交流	友人・知人との交流
年に1回～数回程度	21.4% (165)	2.3% (16)	25.1% (176)
月に1～2回程度	41.0% (316)	17.3% (122)	39.9% (280)
週に1回程度	18.4% (142)	22.7% (160)	18.5% (130)
週に2～3回程度	11.2% (86)	30.2% (21)	11.3% (79)
ほぼ毎日	7.9% (61)	27.5% (194)	5.1% (36)
平均得点	2.43	3.63	2.31

特徴の詳細を検討するために、性、年齢階層、学歴、婚姻状態、主観的健康観、ボランティア経験、地域活動経験、地域特性を独立変数、ネットワークサイズと交流頻度の平均得点を従属変数とし、一元配置の分散分析を行った。各独立変数におけるカテゴリー別の平均の差とその統計的検定の結果は、表3の通りである。ネットワークサイズと交流頻度の両方に統計的に有意な結果が得られたのは、婚姻状態別、ボランティア経験別、地域活

動別、地域特性別であった。ネットワークサイズだけに有意差がみられたのは、学歴別と健康観別であり、交流頻度のみに有意な結果が得られたのは、性別、年齢別の結果であった。

これらの結果の中で、特徴的な傾向がみられたものをあげると、まず、地域特性別の結果があげられる。表3の通り、農村地域と旧住宅地域では、平均得点がそれぞれ11.2と11.1と高く、それに対して新興住宅地域や農村・住宅混合地域は、そ

表3 属性別ネットワーク得点(一元配置分散分析の結果)

カテゴリー		サイズ得点	交流頻度得点
性	男性	10.6	8.2**
	女性	10.7	8.7
年齢階層	60-64歳	10.5	8.2*
	65-69歳	10.6	8.5
	70-74歳	10.9	8.8
学歴	中卒	9.7**	8.4
	高卒等	11.2	8.6
	大卒以上	10.8	8.5
婚姻状態	既婚	10.9**	8.3**
	離婚	8.5	9.7
	死別	10.3	9.1
	未婚	5.9	9.6
地域特性	農村地域	11.2**	8.5**
	旧住宅地域	11.1	8.7
	新興住宅地域	9.7	8.4
	混合地域	9.7	7.6
主観的健康観	健康	11.7**	9.1
	かなり健康	11.2	8.4
	どちらかといえば健康	10.5	8.2
	どちらかといえば不健康	9.7	8.5
	かなり不健康	8.4	8.4
ボランティア経験	よくした	11.8**	9.3**
	少しした	11.5	8.4
	全くしなかった	10.4	8.4
地域活動経験	よくした	12.2**	9.2**
	少しした	11.3	8.2
	全くしなかった	9.6	8.3

注1) *p<.05; **p<.01.

2) 従属変数は、ネットワークのサイズと交流頻度の平均得点

れぞれ9.7と、農村地域や旧住宅地域よりも有意に低かった。これは、農村地域や旧住宅地域在住の高年者のネットワークサイズが有意に大きいことを示している。交流頻度については、農村、旧住宅地域、新興住宅地域がそれぞれ8.5、8.7、8.4と同程度の得点であり、農村・住宅混合住宅地域が7.6と他の地域に比べて有意に低かった。混合地域は、ネットワークサイズがより小さく、交流もより少ないという結果であった。

その他の特徴的な結果では、この1年間の間に福祉関係のボランティア経験がある人や行政区や公民館の地域活動経験がある人と、ボランティア経験や地域活動経験が無い人とを比較すると、表3のような結果となった。ネットワークサイズではボランティアを「よくした」「少しした」と答えた高年者の平均得点が11.8であり、「全くしなかった」という人の10.4よりも有意に高いことが示された。地域活動経験でも「よくした」人が12.2、「全くなかった」が9.6と有意な得点差がある。また、交流頻度についてもサイズと同様の傾向がみられ、ボランティア経験と地域活動経験とも「よくした」高年者の方が「全くしなかった」高年者よりも有意に交流得点が高いことが確認できた。これらの結果は、社会参加活動がソーシャルネットワークに有意に関連していることを示唆している。また、婚姻状態をみると、「既婚」や「死別」のネットワークサイズの平均得点は、それぞれ10.9と10.3であり、「離婚」や「未婚」の8.5と7.9と比べて有意に高いが、逆に離婚者や未婚者の交流頻度は、既婚者や死別者よりも有意に多いという結果であった。ネットワークが小さい高年者については、交流が頻繁にあることにより、また逆にネットワークが大きい人は、人々との交流よりも、より多くの親しい人々がいることによって、ソーシャルネットワークが維持されている可能性がある。最後に、主観的健康観とソーシャルネットワークとの関係を見ると、サイズのみ有意な結果が得られたが、より健康だと感じている高年者ほどサイズが大きく、不健康な人ほ

ど逆に小さいことがわかった。

3. 生活満足度の要因分析

最後の分析として、C市在住の高年者の生活満足度に影響を及ぼしている要因を検討するために、生活満足度を従属変数、ネットワークサイズと交流頻度のソーシャルネットワークを独立変数、その他の性、年齢、学歴、配偶者の有無、職業の有無、主観的健康観をコントロール変数とし重回分析を行った。地域特性別に関連要因を比較するために、データを農村地域、旧住宅地域、新興住宅地、農村・住宅混合地域の4つに分割し、それらの4つのデータ別に同じモデルで重回帰分析を行った。性別(男性=1)、配偶者(有=1)、職業(有=1)はダミー変数とした。投入方法は、一括投入法を用いた。重相関係数、決定係数、有意確立、F値、自由度などの重回帰分析の結果は、表4の通りである。4つの地域の結果全体をみると、いずれの地域においても、ネットワークサイズが生活満足度に有意に影響を与えている要因である可能性が示唆された。各独立変数と従属変数との関連の強さを表す標準偏回帰係数(β)をみると、ネットワークサイズは、農村地域で0.195、旧住宅地域で0.193、新興住宅地で0.308、農村・住宅混合地域で.340と、標準偏回帰係数はどれも高く、しかも、旧住宅地域を除く他の3地域においては、偏回帰係数が一番高く、生活満足度に最も強い影響を及ぼす要因となっていることが示された。なお、もう一方のネットワーク尺度である交流頻度は、各変数間同士の互いの影響力をコントロールして取り除いてしまうと、交流頻度独自の説明力を失ってしまった。その他に、生活満足度に有意な影響を与えている要因は、主観的健康観であり、農村・住宅混合地域以外の3地域において、満足度に有意な影響を与えていることが確認された。これら以外に有意な要因となったのは、旧住宅地域における年齢のみであった。投入された独立変数によって説明される従属変数の分散を表したものが決定係数(R^2)であるが、4地域の

表4 生活満足度とその関連要因の分析（重回帰分析の結果）

	農村地域 標準偏回帰係数(β)	旧住宅地域 標準偏回帰係数(β)	新興住宅地域 標準偏回帰係数(β)	混合地域 標準偏回帰係数(β)
年 齢	-.037	.143*	.020	.008
性 別(男 性=1)	.018	-.063	.174	.008
学 歴	.080	.011	.038	.059
配偶者の有無(有=1)	-.023	.068	-.033	.139
職業の有無(有=1)	.019	.057	-.047	.058
主観的健康感	.167*	.241**	.295**	.148
ネットワークサイズ	.195*	.193**	.308**	.340*
交流頻度	.140	.103	.111	.073
MR	.387**	.413**	.536**	.386*
R ²	.150	.171	.287	.149

注1) *p<.05; **p<.01.

2) R²: 決定係数

3) 性別, 配偶者の有無, 職業の有無はダミー変数

中では、新興住宅地の決定係数が0.287と最も大きく、ネットワークサイズや主観的健康観の説明力が大きいことが示唆された。他の3地域の決定係数は、ほぼ同じ程度であった。重回帰分析の結果をみると、ソーシャルネットワークの中でもネットワークサイズが地域住民のQOLに大きな影響を与えていることがわかった。

IV. 考察

1. 結果のまとめと考察

本研究は、ソーシャルネットワークに焦点を当て、農村地域在住の一般高年者のソーシャルネットワークにどのような特徴があるのか把握すること、また、各地域ごとにソーシャルネットワークやその他の要因が高年者の生活満足度に及ぼす影響を検討することを目的としたものであるが、最後に、これまでの分析結果をまとめると共に、それらの結果に考察を加えてみたい。

C市在住の高年者のソーシャルネットワークの特徴をみると、親戚ネットワークのサイズは、他の友人・知人ネットワークや近隣ネットワークよ

りも有意に大きいという結果であったが、藤崎(1985)は、わが国の高齢者のネットワークは、友人より家族・親族関係が中心であると指摘しているが、一部それを裏付ける結果となった。なお、小林ら(2005)によると、70歳以上の高齢者を対象として1999年に行った全国調査の結果では、ネットワークサイズにおいて友人数よりも近隣数が多いという結果が報告されている。小林らの研究とは測定尺度が違うので、単純には比較できないが、本調査の結果と全国調査の結果とでは、友人と近隣関係では、異なる結果が得られたことになる。C市の高年者の場合、親しい親戚関係が残されており、まだ農村社会的な特性があることが伺える。ところが、もう一方の交流頻度をみると、親しい近隣との交流が他の親戚、友人・知人との交流よりも盛んであることが確認された。高年者の近隣ネットワークはサイズとしては、親戚や友人・知人ほど大きくはなくても、近隣との交流は密であり、C市の高年者にとって近隣関係が重要であることが示唆された。このことは、約4年間にわたる筆者らのフィールドワークにおいても実感したことでもある。C市には、現在も行政区の

活動や公民館活動が盛んである地域が多く、さらに数年に一度行われる大きな祭りには、地域全体で取り組む意識が住民の間には非常に強く、これらが近隣のつながりを強くしているのかもしれない。なお、石川(1997)は、1990年代後半に農村地域である山口県東和町、中間都市である愛知県豊橋市、そして都市部の東京都三鷹市の3地域の社会関係に関する比較調査を行ったが、その中で農村地域で高齢化率が高い東和町では、家族・親戚ネットワークよりも近隣ネットワークが豊かであることを報告している。

地域特性別にソーシャルネットワークをみると、農村地域と旧住宅地域の方のネットワークがサイズでも交流頻度でも他の地域よりも有意に豊かであることが確認された。C市の農村地域は、他の農村地域と同様、現在では専業農家は多くはなく、兼業農家が大半を占めるが、それでも家族互助や地域互助といった、わが国の伝統的な農村社会の特徴をある程度受け継いでいる地域である。また、旧住宅地域は、C市の各交通手段の起点となっているC駅周辺にあり、戦前からの住宅地である。この2つの地域の共通点は、地元出身者が非常に多く、古くから何代にもわたってこの地に住み着いているということである。一方、新興住宅地や農村・住宅混合地域は、いずれもC市が戦後に開拓した大きな住宅地が存在し、他府県や他市からの移住者が多く、比較的最近居住し始めた者が多い地域であるのが特徴である。これらのことから、C市の高齢者にとっては、どれだけ長く、しかも地域に密着して生活しているかが、インフォーマルケア源となるソーシャルネットワーク形成に大きな影響を与えていると推察することができる。これに関連する興味深い結果として、この1年間のボランティア経験や地域活動経験がソーシャルネットワークに有意に影響を与えていることがあげられる。ボランティア活動や地域活動をこの1年でよくした高齢者の方がそうでない人々よりソーシャルネットワークが豊かである。これは、たとえ居住年数が長くなくても、様々

な社会活動への参加を積極的に促すことで、ネットワークを拡大する可能性があることを示唆している。これも、筆者らがC市においてフィールドワークをする中で実感したことであるが、C市では東京などの都市部とは違って、依然として公民館や行政区などの地域活動が盛んなところが多く、それらの活動によって、高齢者はネットワークを拡大・維持しているとも考えられる。なお、本論では報告しなかったが、地域特性と地域活動経験とのクロス集計の結果をみると、農村・住宅混合地域の高齢者は、他の地域に比べて有意に地域活動が少なかった($p < .001$)。このように、農村・住宅混合地域に住む高齢者は、ネットワークが豊かではなく、それらの人々は地域活動にも参加していない可能性がある。今後、このような農村・住宅混合地域の住民に対して、ボランティア活動や様々な地域活動をより積極的に推進していくことにより、伝統的な農村地域と新しい住宅地域相互のネットワークを広げることが政策的に必要なのかもしれない。

最後に、重回帰分析の結果、仮説通り、ソーシャルネットワーク、特にネットワークサイズが高齢者の主観的QOLの一つである生活満足度に有意に影響を及ぼしていることがわかった。先行研究において、ソーシャルネットワークが主観的幸福感などのQOL尺度に影響を与えていることがすでに報告されているが(石川・渋澤2001;石川1997;玉野ら1989)、本研究でも同様の結果が得られた。本研究においては、C市を地域特性に基づいて農村地域、旧住宅地域、新興住宅地域、農村・住宅混合地域の4つの地域に分け、重回帰分析を行ったことが独自の分析視点であった。ネットワークサイズは、地域に関係なく、高齢者のQOLに有意な影響を及ぼしていることが確認された。一方、交流頻度の生活満足度に対する独自の効果については、確認することができなかった。これらの結果から、親戚、友人・知人、近隣とのネットワークの拡充は、今後、インフォーマルケアを推進する上で重要な要素となることが示唆さ

れた。しかし、地域によってネットワークの大きさの違いや交流の多寡があるなど、地域によりネットワークのあり方が異なるので、今後は、地域特性を踏まえた上で、ソーシャルネットワーク拡充のための政策的アプローチが必要であろう。

2. 本研究の限界と今後の課題

最後に、本研究の限界と今後の課題を記しておきたい。まず、本研究では、地域特性を分析枠組みの重要な変数として用いたが、これに関する先行研究は非常に限られているために、今回は地域特性に詳しいと思われる行政職員と社会福祉協議会職員からの意見をもとに、試行的に地域特性の枠組みを作成した。その点では、あくまでも試みであるので、今後は、その妥当性について検討することが課題となる。しかし、地域特性を踏まえた上でのネットワーク分析という視点は、様々なところでその必要性が叫ばれているが、実際には、ソーシャルネットワークに関する実証研究そのものが、福祉分野ではそれほどなされているわけではない。今後は、地域特性を視野においた多くの調査研究が実施されることを期待したい。

次に、ソーシャルネットワーク尺度ついてであるが、本研究では、ソーシャルネットワークのサイズや交流頻度を下位尺度として用いた。ネットワーク研究は、従来のサイズや頻度などの構造的要素と相互作用的要素という視点だけではなく、家族・親戚、友人・知人、近隣などのネットワーク源の視点、さらにインターネットや携帯などの新しいコミュニケーション手段を用いたネットワークのあり方を考慮した視点も必要である（澤岡ら 2006）。現状では、各研究者によって使用する下位概念や項目が異なるために、まだ標準化された尺度や分析枠組みが確立されているわけではない。このことについては、かなり前から指摘されていることでもあるが（O'Reilly 1988）、今後、社会福祉分野においてもソーシャルネットワーク研究が広がる可能性があり、互いの研究結果を比較検討するためにも、標準化された尺度が必要で

ある。

また、本研究の枠組みには、生活満足度に影響を及ぼす要因として、収入など関連があると考えられる他の要因を投入しなかったため、今後は、それらの要因を含めた検討を行う必要があるだろう。

最後に、本研究の最終的な目的は、インフォーマルケアとフォーマルケアの適切な組み合わせを検討することである。本研究では、インフォーマルケア源となるソーシャルネットワークに焦点をあて、その視点から分析を進めてきた。しかし、本研究で採用した方法だけでは、インフォーマルケアの可能性を十分に検討することはできない。今後の課題としては、地域のインフォーマルケアの可能性について、他方法により多面的に検討すること、さらにはフォーマルケアとインフォーマルケアの適切な組み合わせを検討することがあるが、現在その課題に取り組んでいるところである。

謝 辞

筆者ら研究グループは、2001年4月より数年にわたってN県C市を対象地として、フォーマルケアとインフォーマルケアの組み合わせに関する様々な調査研究を行ってきた。この期間に本研究に協力して下さったC市在住のすべての人に感謝を申し上げたい。

本研究における執筆者以外の研究メンバーは、足立紀子（前愛媛大学）、君島菜菜（立正大学）、斉藤雅茂（上智大学大学院生）、木本明（東京家政学院大学）、武居幸子（上智大学大学院生）、西田ちゆき（ルーテル学院大学大学院生）、藤原瑠美（ホスピタリティ・プラネット）、三浦虎彦（上智大学福祉専門学校）、渡辺敏恵（聖徳大学短期大学部）である。

なお、本研究は、平成15～17年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(B)）：課題番号15330120「生活の質から見た高齢者に対するフォーマルケアとインフォーマルケアの組み合わ

せ地域モデル」の助成を受けた研究の一部である。

注

- 1) 筆者が大学の紀要等を除いた社会福祉関係の『社会福祉学』、『地域福祉学』、『地域福祉研究』、『社会福祉研究』、『ソーシャルワーク研究』などの主要な学術雑誌に掲載された2001年から2008年までの約7年間の論文をレビューした限りでは、ソーシャルネットワークの実証研究論文は、筆者の論文を除くと、渡辺(2005)の研究ノート1本のみであった。
- 2) なお、4地域は、地理的な特性で分類したのではなく、C市の最小の行政単位である行政区をベースにその特性ごとに分類しているため、本研究チームでは、これら4地域の人口規模、世帯数、高齢者人口等を正確に把握するための基礎的なデータを有してはおらず、それらを示すことができなかったことを断っておきたい。

参考文献

- Antonucci, T. C. (1990) Personal characteristics, social support, and social behavior. In Binstock, R. H. & Shanas, E. (eds.) *Handbook of aging and social sciences*, 3rd edition, 205-226.
- 浅川達人 (2003) 「近隣と友人」古谷野亘・安藤孝敏編『新社会老年学；シニアライフのゆくえ』ワルドプランニング, 133-139.
- Barnes, J. A. (1954). Class and Committees in a Norwegian Island Parish. *Human Relations*, 7, 39-58.
- Berkman, L. F.; Syme, S. L. (1979) Social Networks, Host Resistance and Mortality: A Nine-year Follow-up Study of Alameda County Residents, *American Journal of Epidemiology* 109 (2), 186-204.
- Bott, E. (1971). *Family and Social Network: Norms and External Relationships in Ordinary Urban Families*. Tavistock, London.
- Cohen, S.; Syme, S. L. (eds.) *Social Support and Health*. Academic Press, Orland.
- 原田謙, 浅川達人, 齊藤民, 小林江里香, 杉澤秀博 (2003) 「インナーシティにおける後期高齢者のパーソナルネットワークと社会階層」『老年社会科学』25(3), 291-304.
- 林暁淵・岡田進一・白澤政和 (2006) 「大都市独居高齢者の子どもとのサポート授受パターン—基本属性、生活満足度との関連からみた特徴」『ケアマネジメント学』5, 56-64.
- 林暁淵・岡田進一・白澤政和 (2008) 「大都市独居高齢者の子どもとのサポート授受パターンと生活満足度」『社会福祉学』48-4, 82-91.
- 広瀬美千代・岡田進一・白澤政和 (2006) 「家族介護者の介護に対する認知的評価に関連する要因—介護に対する肯定・否定両側面からの検討」『社会福祉学』47-3, 3-15.
- 藤崎宏子 (1985) 「老年期の社会的ネットワーク」副田義也編『日本文化と老年世代』中央法規出版, 89-148.
- 石川久展 (1997) 『高齢者の社会関係に関する研究—4地域の高齢者の社会関係の比較研究及び社会関係と関連変数との関連分析』日本社会事業大学大学院博士論文.
- 石川久展・渋谷田鶴子 (2001) 「日系高齢者の社会関係と抑うつに関する研究—ロスアンゼルス在住の日系高齢者の社会関係と抑うつとの関連について—」『テオロギア・ディアコニア』ルーテル学院大学社会福祉学科25周年記念論文集, 119-133.
- 神部智司・岡田進一 (2006) 「ケアハウス入居者高齢者の生活満足度の有用性に関する研究—信頼性と妥当性の検証—」『生活科学研究誌』4, 1-8.
- 小林江里香・杉原陽子・深谷太郎ほか (2005) 「配偶者の有無と子どもとの距離が高齢者の友人・近隣ネットワークの構造・機能に及ぼす効果」『老年社会科学』26(4), 438-450.
- 古谷野亘 (1991) 「社会的ネットワーク」『老年社会科学』13, 68-76.
- 古谷野亘・安藤孝敏・浅川達人ほか (1998) 「地域老人の社会関係にみられる階層的補完」『老年社会科学』19(2), 140-149.
- 古谷野亘・柴田博・芳賀博ほか (1989) 「生活満足度尺度の構造；主観的幸福感の多次元性とその測定」『老年社会科学』11, 99-115.
- 古谷野亘・柴田博・芳賀博ほか (1990) 「生活満足度尺度の構造；因子構造の不変性」『老年社会科学』12, 102-116.
- 峰島里奈 (2008) 「児童期・青年期に死別経験をした青年の悲哀過程—悲哀の課題とソーシャルサポートとの関わりについて—」『社会福祉学』49-1, 46-59.
- Neugarten, B. L.; Havighurst, R. J. & Tobin, S. S. (1961) The measurement of life satisfaction. *Journal of Gerontology*, 16, 134-143.
- 西村昌記・蜂谷幸夫・古谷野亘 (2003) 「一人暮らしの

- 高齢者の統制感・生活満足度・独居継続意志に関連する要因』『社会老年学』25(2), 234.
- 西下彰俊 (1985) 「高齢女性の社会的ネットワークー友人ネットワークを中心にー」『社会老年学』26, 43-53.
- 野口裕二 (199b) 「高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポートー友人・近隣・親戚関係の世帯類型別分析ー」『老年社会科学』13, 89-105.
- O'Reilly, P. (1988) Methodological issues in social support and social network research, *Social Sciences and Medicine*, 26(8), 863-873.
- 冷水豊・石川久展・山口麻衣・ほか (2005) 『生活の質から見た高齢者に対するフォーマルケアとインフォーマルケアの組み合わせ地域モデル』平成15～17年度文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究(B)) 研究成果報告書, 上智大学.
- 佐藤真一・長田由記子・矢富直美ほか (1989) 「中・高齢者における生活の志向性と満足度」『老年社会科学』11, 116-133.
- 澤岡詩野, 福男健司, 浜田知久馬 (2006) 「都市高齢者のネットワークタイプによる友人との交流媒介としての携帯電話の利用状況」『老年社会科学』28(1), 12-20.
- 玉野和志 (1990) 「団地居住老人の社会的ネットワーク」『社会老年学』32, 29-39.
- 玉野和志, 前田大作・野口裕二・中谷陽明・坂田周一・Jersey Liang (1989) 「日本の高齢者の社会的ネットワークについて」『社会老年学』30, 27-36.
- 渡辺晴子 (2005) 「痴呆性高齢者のソーシャルサポートネットワーク」『地域福祉研究』33, 112-123.

An Impact of Social Networks on Life Satisfaction among Young-old People in Japan ; Analysis of Social Networks in Terms of Area Characteristics

Hisanori Ishikawa^{*1}, Yutaka Shimizu^{*2}, Mai Yamaguchi^{*3}

^{*1}Kwansei Gakuin University, ^{*2}Nihon Fukushi University, ^{*3}Japan Lutheran College

The purpose of this study is to describe the characteristics of social networks and examine the impact of social networks on life satisfaction among young-old people (aged 60 to 74) in C-city. A total of 1059 young-old people, who were not in need of care, were selected by random sampling in C-city. A total of 810 face-to-face interviews were successfully completed. A dependent variable was evaluated by life satisfaction consisting of 5 items and each item was ranked on a 6-point scale. A social network, an independent variable, was measured by two kinds of items such as size and frequency. One-way ANOVA was conducted to examine the characteristics of social networks among young-old people. Four multiple regression analyses based on four types of area characteristics were conducted to examine the effect of social networks on life satisfaction with controlling for socio-demographic variables such as age, gender, education, marital status, working status, self-rated health.

The results of the one-way ANOVA showed significant differences in social network sizes by area characteristics, experience of social participation within ne year, and marital status. The results of the multiple regression analyses indicated that social networks and self-rated health had significant impacts on life satisfaction after controlling for other variables. In other words, Japanese young-old people with a high degree of social networks were more likely to show an increase in their psychological well-being.

Key words: social networks, life satisfaction, young-old people, area characteristics, informal care